

毎日歌壇

加藤 治郎 選

戦争のニュースが突如遮断され双子のパンダの映像になる 東京 嶋村 純

△評▽痛烈な風刺である。深刻な戦争が続いている。遮断したのは何らかの権力だ。テレビのジャーナリズムは滅亡したのか。

藤の花が垂れて水面につく頃におでこに乗せにくるカワイルカ 枚方市 久保 哲也

△評▽悪夢だ。カワイルカの顔が恐ろしい。正岡子規の藤の花の歌を踏まえている。体じゅう楽譜になって死ぬことを諦めさせてくれるカッター 帯広市 小里 京子

ひかる、とは手放すこと知りながら太陽に消え入った跳躍 平塚市 芝澤 樹

コスモスの畑のなかの白いドアをあけたら僕の影を見つけた 所沢市 仲村 一郎

サラダバードリンクバーで深夜まで友と見えない夢を見ていた 横浜市 友常 甘酢

汚れても曲がったままでも生きていく買って帰ろう訳あり野菜 ふじみ野市 雨雨雨汰

焼き芋。パフェをテイクアウトして姉と食む、時の流れは時に優しく 直方市 大石 聡美

潮騒に取り残されたヒメ玉がからからと鳴る夏の残響 中国 岸 志帆莉

ハロウィンのお化けは施設の壁を飛びりハビリ体操黙って見せる 沼津市 麻場 育子

水原 紫苑 選

機関車は夕闇の高原をゆく群蝶のごとき火の粉噴き上げ 京都市 小池ひろみ

△評▽威風堂々とした中にも、ほのかな存在のかなしみをたたえた機関車の姿。「群蝶」の無言の炎が美しい。

翅の色あお色ばかり選ぶ子は舟に乗らないあの子を思う 横浜市 大原 香花

△評▽幼いものが幼いものにひかれる寂しさ。舟に乗らない子は遠い世界を拒むのか。違った、と硬く伝えて検査薬ごみ箱にふかくふかく棄てたり 東京 奥山いずみ

すこしずつ違った時を刻みゆく時計草の盤人ひとの群れ 中国 岸 志帆莉

自画像で右頬の影濃くすれば棲みついているものが見つかる 札幌市 橋 晃弘

川面に見えない閃光が走ってみえる寒さの夜にジャズが聴きたい 横浜市 永永 キヌ

舞の字の根に含まれた死のことをふと思いつつ出番を待った 宇都宮市 霧島あきら

ピアノスト少し上向き監視する和音の蝶の振りまく雲母を 静岡市 海瀬安紀子

湖のそばで暮らしていつの日かわたしも誰かの水源になる 東京 小亀 合子

日本海の色を見たくて西田幾多郎記念哲学館をおとす 浜松市 尾内甲太郎

伊藤 一彦 選

コンビニのレジの袋が駅前でコンテナポラリーダンスを踊る ふじみ野市 雨雨雨汰

△評▽軽いレジ袋が風に舞うのを見てコンテナポラリーダンスと歌ったのが面白い。枠にとらわれない自由への希求を感じる。星光るその瞬間に私たち数億年のタイムカプセル 横浜市 砂月 七

△評▽星の瞬くのを見ながら、今の時空を二気にとびこえる想像力の表現力が見事だ。なに受ける器であるかこの凹み炉辺の明かりに響く掌 取手市 萌 彦

手を振ってまた会うことを約束す寂しさ知らぬ冬の星座よ 東京 新井 将

昔から落ち着きのない子はいたが今は薬をただ飲まされる 牛久市 村山 仁美

民はみな愚民であれば望まじや大食いテレビゲラゲラ笑わす 杵築市 緒方袈裟昭

ケータイが教えてくれるアレコレのほんの一部で余生は足りる 東京 青木 公正

新生児の誕生になほ笑ひ声わくとぶガザのシフ病院に 鹿嶋市 大熊佳世子

アポカドの種の大きさを誇らしげ堂々として冬の輝く 桜川市 海老原順子

差し控えますとは都合よき言葉言いたくないと正直に言え 吉野川市 喜島 成幸

米川千嘉子 選

マンモスを解体しおえ平等にくばる両手をわれら失う 春日部市 宮代 康志

△評▽氷河時代、狩猟生活をする人々はその巨大な肉を皆で分けたはず。今はその発想そのものが失われた、と。鋭い下句。菊の香や鬼一法眼、菊畑名優ありしを思い出すなり 東京 河野多香子

△評▽歌舞伎「鬼一法眼三略巻」「菊畑」の段。秋の香によみがえる舞台の華麗さ。娘一家固定電話を止めにして皆スマホ持ち個人から個人へ 掛川市 宮川 正夫

父さんとラーメンの待つリビングへ飛び降りかけた身体と降りる 四日市市 早川 和博

病棟に淹れてもらひしはうじ茶の忘れられずまたけふも淹れてみる 千曲市 中村 美樹

「いつもの」と言ふまでの緊張も拭きとられ非接触のまま珈琲を待つ 東京 真鍋 真悟

孫の名は彩音・心音に希音・奏音シンガー目指した息子の夢の跡 東大阪市 池中 健一

トランペットの悲しき音よれここに居ると息の呼ぶ声にも聞こえて 吹田市 鈴木 基充

願はくば「介護はごめん」「ごちそうごめん」老いの二人の胸の内さびし 春日市 林田 久子

人生の八回までを投げ抜いてスコアボードの失点かぞえる 浜松市 久野 茂樹

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。